

京都大学の瀧本准教授によれば、パラダイムとは科学史家トーマス・クーンが1962年に刊行した「科学革命の構造」の中で発表した概念で、その時代や分野の中で多くの人が当然のことと見なしている価値観のことです。

そこで革新的な大きな変化があると「パラダムシフトが起こった」という風に使われます。例えば、天動説から地動説へと天文学の常識が変わるようなことです。クーンは天動説から地動説へと、その常識がどのように変わったのかということの研究した結果、「それは世代が入れ替わったからだ」と結論づけているそうです。(※1)

現在、世界のSRI市場は、欧州952兆円(※2)、米国767兆円(※3)、日本を除くアジアで5兆円(※4)とされています。それに対して日本は、8,731億円(※5)、全世界の中でわずか0.05%でしかありません。

歴史的にSRIのプレーヤーは、個人に加えて公的年金、労働組合、宗教団体とされています。世界最大の公的年金であり、130兆円を運用する日本の年金積立金管理運用独立行政法人(GPIF)は、現在1円もSRI運用をしていません。これが日本のSRI市場が成長しない、大きな理由であると見られており、OECDのレポートでも取り上げられたほどです。GPIFがわずかでもSRI運用をスタートする日が来れば、それこそパラダイムシフトと呼ばれるかもしれません。

世界最速で進む少子化と高齢化が、人々の価値観をどのように変え、どのような製品やサービスが求められるかをいち早く察し、研究開発や商品化をスタートさせている企業に投資する、すなわち、来るべき日本社会のパラダイムシフトに投資するのが、SRIと言えます。

世代が変わったことによってパラダイムシフトが起こるとすれば、それは若者によってなされるということです。ですから、社会や企業が若者をどのように扱っているかを調べることは、SRIリサーチの観点からは、最重要課題です。そのことと企業価値、成長や株価との相関について、さまざまな仮説を立て、検証し、評価の指標になりうるかどうかをチェックするのが、SRIアナリストの仕事です。

※1. 瀧本哲史「君に友だちはいらぬ」講談社

※2. “European SRI Study 2014”, Euro-SIF

※3. “Report on US Sustainable, Responsible and Impact Investing Trends in the United States 2014”, US-SIF

※4. “2014 Asia Sustainable Investment Review”, ASrIA

※5. 「最新SRI市場残高」SIF Japan